



第六十一号

胡弓

メルマガnoichi61号、今月のテーマは「胡弓」。

日本唯一の擦弦楽器として、現代においてもその存在がキラリと光る胡弓。

今月は、胡弓演奏家としてご活躍の川瀬露秋先生のお話を中心に、

胡弓という日本伝統楽器の魅力に迫ります！

私たち箏曲愛好家は、古典芸能の中では「三曲」という分野に属します。三曲というのは三種の楽器のことで、今日では三味線、箏、尺八になりますが、古くは尺八ではなく胡弓という楽器がその一角を占めていました。明治以降、胡弓が尺八に代わったことで三曲の音楽はその可能性を大きく広げたと言えるでしょうが、一方で、未だ胡弓の持つ普遍性が生き続け、今日においてもその魅力が必要とされていることは、私たちのジャンルにとつて意味深いことだと思えます。そこで、今回のメルマガ《noichi》では、改めて胡弓の魅力について考えてみることに致しました。

私にとつての胡弓は、今から約一〇年前、祖父母のスズメで尊敬する森雄士先生のところへお稽古に通わせて頂くようになったことが、胡弓と出会うキッカケでした。森先生は、宮城道雄先生が考案された宮城胡弓（一般的な胡弓より大きい）の第一人者でいらしたので、私も先生のスタイルに習つて、宮城胡弓を勉強させて頂くことになりました。

胡弓は、一見すると小ぶりの三味線のように、既に三味線

を習っていた私には馴染みやすきもありましたが、弓を扱うことは初めての経験だったので、弓の使い方にはずいぶんと悩まされました。しかし、お稽古を重ねていくうちに擦弦楽器の面白みが少しずつわかるようになってきました。旋律楽器を演奏できる喜びは、三味線や箏からは得られない、特別なものでした。

胡弓の魅力は、なんと言っても音色にあると思います。音色を言葉にするのは難しいことですが、音色が放つ哀愁と色気は、同属楽器の二胡や馬頭琴とも違う、胡弓独特の持ち味だと私は思っています。特に、三味線との相性は抜群で、二つの楽器が醸し出す幽玄の世界観は、三曲の分野のみならず、富山県に伝わる越中おわら節や、義太夫節、歌舞伎の下座音楽など、今日では広く活用されています。

なかなかとつきにくい楽器かもしれませんが、とても素敵な楽器なので、是非、興味を持って頂ければと思います。簡単ではありますが、胡弓のご紹介をさせて頂きました。

奥田雅楽之二



今回メルマガ《noichi》編集部では、胡弓の魅力について更に調査するべく、インタビューをさせて頂くことにしました。取材をお願いしたのは、胡弓の第一人者であられた故・川瀬白秋先生の後継者であり、現在は歌舞伎の黒御簾音楽などで活躍中の川瀬露秋先生です。川瀬露秋先生と雅楽の二は、よきお友達としてお付き合いしています。

胡弓をはじめたきっかけは？

胡弓をはじめたきっかけですが、白秋先

生の内弟子に入り、歌舞伎の黒御簾の演奏のお供で、お手伝いするのに胡弓を扱えないと、また弾けないといけなないと、先生からお稽古していただきました。最初の手解きの曲は、《黄金虫》でした！

そうでしたか。《黄金虫》だと、音階的に合いそうですね。胡弓をお勉強される上で、苦勞したことは、具体的にどのようなことですか？

最初に胡弓をもったときに三味線のツボの感覚で弾いてしまい、ツボが狂いました。胡弓は小さいからツボの幅を縮めないといけないことでした。

なるほど。私の専門は宮城道雄先生が考案された大きい胡弓なので、三味線の延長線上にあると思います。胡弓は三弦と似ていると思えますか？

三味線と胡弓は似ているとは思いません。三味線を小さくした形ではありませんが。

胡弓は三味線の半分くらいの大きさでもんね。胡弓の初舞台はいつですか？

初めての舞台は「露秋」をいただいた、国立劇場の白秋会記念演奏会で、《三曲系の調べ》を演奏しました。名取披露の曲を決めるときに、せつかくなら胡弓も弾ける曲にしないということでの曲に決まりました。譜面での稽古ではなく、とにかく真似しなさいと暗記稽古でやっていただきました。また、今月雀右衛門さんの襲名で、博多座で《十種香》をやってりましたが、二十数年前、お父様『先代』の歌舞伎座の舞台に、たまたま一日だけ、白秋先生と先輩がどうしても仕事が重なり、初めて歌舞伎座の黒御簾で弾か

せていただきました。もう緊張で震えて弾いたことを覚えて
います。時を経て、今回も弾かせていただき思い出深かつ
たです。

胡弓の魅力は何ですか？

わたしは、やっぱり哀愁のある音だと思います。

歌舞伎だと、縁切りの場面に、必ず『ひなぶり』という合
方が使われますが、長唄の三味線に胡弓が入り、切なさを
表現していると思います。《ひなぶり合方》は、地唄の恋の
重荷という曲です。胡弓で、三曲もの、例えば獅子物も弾き
ますが、わたしは女心の切なさを歌う《雪》や《黒髪》の胡
弓が好きです。

胡弓の大きな特徴は、やはり弓を使うことだと思いま す。弓についてお話をお聞かせ下さい。

弓は、川瀬順輔先生のお弟子さんの竹を作る方が器用
な方で(仏像なども彫刻なさる方)その方にお願ひしまし
た。工房が近くて、何度も足を運び、先のカーブの部分や、
長さ、軽さなど、こだわり、竹の素材に漆を塗って、さらに
螺鈿や、金をあしらったものを、作りました。それを使って
います!!ずっと以前は、木は重たいので、竹で作ったよう
です。

弓の手に巻いた、赤い紐は、飾りにもなりますが、弓の
重みのバランスを調節する意味もあります。また、房につい
ては、見た目の華やかさが注目されがちですが、弓の重さ
のバランスをとれるように、房の飾りは自分で作ります。松
ヤニは、バイオリンの固形のものを使っています。弾いてみ
てから、その時々々の素の状態で、少し松ヤニをつけたりし
ます。わたしのこだわりではなくて、白秋先生に教えられ
たことを、そのままやっているといった感じです。



Illustration: morimoe

駒は三味線のものとは形や材質など、違うようですね。

駒はやはり母が演奏する曲によつて例えば、地歌ものや、
獅子もの、またお芝居の場面(しっとり、明るく)また、音の
大きさなど、駒を変えていました。桐が基本ですが、竹や、ツ
ゲや、象牙もありました。いろいろな木で作っていた
ものがあります。木の密度で音の出方が違うと教わりまし
た。また駒の位置でも音が変わりますし、とても奥深い、ま
たいろいろな表情の心情の音を出せる楽器だと思っています。

最後に、胡弓に興味のある方々へメッセージをお願いします。

胡弓は、日本で唯一の擦弦楽器です。私ども(白秋会)は、
三曲の古典の曲の演奏のほかにも、長唄や義太夫、常磐津な
ども胡弓を演奏することがあります。また歌舞伎の黒御
簾の演奏など、哀愁おびた音色は、とても心に響く音色だ
と思います。また宮城流大胡弓や、越中おはらの胡弓や、新
曲や民謡なども、それぞれに情緒ある特徴があり、ぜひ胡
弓に、注目していただきたいです。

◎あともがき◎

胡弓の「胡」は、胡瓜(きゅうり)、胡桃(くるみ)、胡椒な
ど、西方からシルクロードで伝わった物に使われる漢字だ
そうだ。少し変な話をゆるしてもらえらば、楊貴妃は
特別な体臭の持ち主で、胡臭(よい匂いのわきが)で男性を
虜にしていたとか。楊貴妃が風呂に入った後は、周囲の女性
たちは残り湯を競って取り合い、自らの部屋にまいたなど
という話も残っている。胡弓の「胡」には西方からという意味
以外にも、何か素晴らしいもの、あこがれなどの意味合いが
あったのではないかと想像する。

胡弓もおそらくベルシャカモンゴルあたりにルーツがあ
るだろう。どういう経緯で日本に伝わったのかはつきりしな
いらしいが、日本では唯一の擦弦楽器だそうだ。しかしヴァ
イオリンや馬頭琴など、世界中に擦弦楽器はたくさん残つ
ている。何か普遍的な魅力をもった楽器には違いない。その
せいか分からないが、奥田雅楽之一が胡弓を習っていた故
森雄士先生の演奏を江戸東京博物館で聞いたときの、胸の
奥をつつかれているような、頭の深いところがしびれるよう
な、不思議な感覚を今でも憶えている。

グラフィックデザイナー (http://www.1938.jp) みやはらたかお

